慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『山門秘伝』と『山門建立秘决』
Sub Title	A study of "Sanmon-konryū-hiketsu" : expansion from the contents of "Sanmon-hiden" showing the
	history of Mt. Hiei-zan Enryaku-ji temple
Author	高橋, 悠介(Takahashi, Yusuke)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2018
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.53 (2018.),p.167-197
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20190228-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『山門秘伝』と『山門建立秘决』

高

橋

悠

介

はじめに

究においても、慈覚大師円仁の立石寺(山形市・山寺)入定説 皇正統記』の山門関係記事の注釈に活用しており、また史学研 古くは御橋悳言(一八七六~一九五〇)が『平家物語』や『神 合わせて一冊の形で刊行されている。国文学研究においては、 れも、比叡山の諸堂塔の由緒や寺域の意義を説くもので、両者 門建立秘决』『山門秘傳見聞』という版本がある。内容はいず 慶安四年(一六五一)八月に刊行された比叡山の寺誌に、『山

> 「南北朝時代のはじめ」と推測している。それは、永徳三年(一 本書の成立については、勝野隆信が「慈覚大師入定説考」で

三八三)に上野国世良田長楽寺の了義が記した「慈覚大師画像

賛」に、

片足」。、其日昇一空中一、向一東方一、其日下野州日光山供養 「···文徳天皇貞観六年正月十四日帰寂」++、花芳峰:留」、沓

其日羽州立石寺入定、隠顕出没、

巨ヶ測り巨ヶ量り、」

とある記事が、『山門建立秘决』の

「慈覺大師者、於前唐院御入滅畢"、

爰自御館飛出『行東方』、

御草鞋落華芳/峯"、其日其時至垂^『出羽國』。」

という記事や、『山門秘傳見聞』 の関連記事によってなされた

などに関連して、しばしば引用されてきた。

見解を踏襲する研究は多い。例えば佐々木馨氏は、円仁の入定 慈覚大師の御頭が立石寺にあると書いているが、南北朝期との せる訳でもなく、日蓮もすでに弘安三年(一二八○)の書状で であろうという考察などに拠っている。両者は同文的一致をみ

ら禅寺に転換した後、再び天台宗に復したのを「南北朝期の末

説話の舞台である立石寺が、北条時頼の外護により天台寺院か

け、 か、 これを本書の成立時期と関連付けて 室町初期の頃であろうか」とした入間田宣夫氏の見解を受

編纂されたというのも、おそらくその天台宗への復宗と因 て、「山門建立秘訣」「山門秘伝見聞」などが、南北朝期に

「慈覚大師の立石寺入定を伝える最も整備された史伝とし

果するに相違ない。」

を主題としており、立石寺関連の記事がごく一部に過ぎない点 けて断定するのは問題があろう(両書は基本的に比叡山の堂舎 ている訳でもなく、確たる根拠もない中で、そのように関連づ とする。しかし、版本の本文中に成立に関わる本奥書が含まれ

ことにする

本として、『山門秘傳』を指摘したい。管見の限り、 ここで、版本『山門建立秘决』の成立を考える際に重要な写 横浜市

す。

調査し得た伝本は、

いずれも山門建立秘决・山門秘傳見聞

も付言しておく)。

事は、『山門秘傳』の本文にほぼ対応することから、 の写本である。後述する通り、『山門建立秘決』 称名寺蔵本と叡山文庫毘沙門堂蔵本が伝存し、 前者は鎌倉後期 の前半部の記 対応記事

る。神奈川県立金沢文庫で二〇一八年十一月から開催された「顕 がある部分については、成立が鎌倉後期まで遡り得ることにな われた神々―中世の霊場と唱導―」展において、国宝・称名寺

れることはできなかった。 立秘决』との対応を指摘したが、 図録という性格上、 詳細にふ

聖教『山門秘傳』を展示した際、

図録の解説において

『山門建

から見えてくる『山門建立秘决』及び『山門秘傳見聞』 本文と写本間での異同、及び 過程の問題について述べたい。あわせて、『山門秘傳』 『山門建立秘决』との異同を示す

まず、 二、『山門建立秘决』『山門秘傳見聞』 『山門建立秘决』 『山門秘傳見聞』 について、 の伝本 書誌を記

そこで本稿では、これらの書誌を紹介した上で、両者の比較 の成立 - 168

安四年八月の刊記を持つものと、寛文九年正月の刊記を持つも 各一巻が合わせて一冊となっており、 山門秘傳見聞の末尾に慶 版心、 白口双内向黒魚尾。 柱題、

が認められる。そこで、 他の伝本については各々の本に特有の要素のみ述べる。 最初に岩瀬文庫本の書誌の中で版式を

両者は同版で、字画や匡郭の欠損にも一致する部分

●慶安四年八月刊本

○西尾市岩瀬文庫蔵本 九九一二四

袋綴、一冊。渋表紙 (二七・九×一八・八糎)。外題なし。表

四角の擦消跡があり、 紙左上に「五」と朱書。下小口に「山記全」墨書。見返左下に 左端に「西塔莊多谷/栄泉院蔵本」と墨 文末尾に朱陽方印

建立秘决』(以下前者)が十三丁、続く『山門秘傳見聞』 各巻内題、「山門建立秘决」及び「山門秘傳見聞」。 。 以 下 山門

五糎)。 名は、 四周単辺 本文、漢文。附、 元から刷られているものに加え、 が二十六丁 毎半葉十行、 (前者二二一·〇×一五·五糎、 返点・送仮名・連合符(一部)。返点・送仮 (以下、いずれの伝本も同様の順序・丁数)。 每行字数二十一字。 後からの書入れも多い。 後者二一·九×一五

> 門秘傳見聞」。 一~六丁)・「山門建立秘决巻一」(第七~十三丁)、後者は「山 前者には尾題なし、 後者末尾には「秘伝見聞※

前者は

「山門建立秘决」

記の右余白に「西塔栄泉院」と墨書し、 と刷る。刊記 「于時慶安四歳/仲秋吉辰/庄右衛門願之」。 双郭墨陽方印 一天盛

印記、 と記す。 を捺し、後見返にも同筆で「為二親師頓證菩提也」(菩提は合字 前者の第一丁表に墨陽方印 「山門西塔榮泉院蔵本」、 朱

方印 す)、朱陽方印「奉納阿都山/寺流芳萬年/大行満願海」、 陽方印「大行満 「元慶寺印」、 / 願海蔵」 (後者の第二丁表と刊記の上にも捺 朱陽方印 「岩瀬文庫」。 後者の尾題の前

「寂忍房

/圖書章」。

渋表紙の表面が剝がれ、 ○叡山文庫真如蔵本 真如蔵 淡灰色の下地が残った状態 内 12 14 1625

×一九·四糎)。 外題なし。 表紙右上に蔵書票 「真如蔵書

数一六二五、 『山門建立秘决』 書冊五七六二、 の巻首に「十四」と朱書、 昭和廿九年八月十日寄托」。 「山門東塔南谷浄

教房眞如蔵

十四九十五

○京都大学附属図書館蔵本 蔵/24/サ/20

香色表紙(二五・一×一八・四糎)左上に三層の縹色双郭題簽

を貼り「山門建立□□/山門秘傳見聞」と墨書 (□は虫損)。

票(□□撰述/第62號)を貼り、その上にさらに蔵書票「臧/ 表紙中央下部に朱陽方印「臧經書院」。表紙右上に赤色の蔵書

24/サ-20」を貼付。下小口に「山門建立」墨書。本文には墨

滅跡あり。 で返点・送仮名・区切点や注記を書入。刊記の丁の匡郭内に墨 『山門建立秘决』巻首に双郭朱陽方印「壽命院蔵」、朱陽方印

慶安四年八月刊 寛文九年一月印本

「青蓮/王府」、朱陽方印「京都/帝國大學圖書之印」。

○京都大学附属図書館蔵本 日臧/未刊 276

渋表紙(二五・八×一八・八糎)左上に「山門建立秘决」と朱

書。右上に蔵書票 『山門建立秘决』巻首に朱陽方印「釋氏/祐芿」、朱陽方印 「日臧/未刊/27」。

/帝國大學圖書之印」。後見返に「祐芿臧」と大字墨書

常所持」と手沢銘。右上に整理番号を記した蔵書票貼付。 建立秘决」と墨書。表紙右上に「宇十三」と朱書、 渋表紙(二六・三×一八・七糎)左上に素紙題簽を貼り「山門 右下に「察

刊記「法華宗門書堂/寛文九己酉年/正月吉辰/武村市兵衛昌 には墨で返点・送仮名を振り、字画の欠けた部分にも補筆する。

常/村上勘兵衛元信/村上平左衛門常知/八尾甚四郎知春」。 『山門建立秘决』巻首に朱陽円印「浄土宗圖書館蔵本/禁賣典」、

朱の批圏点を施す。

○立正大学図書館蔵本

上ノ四」と墨書し(□は蔵書票の下で見えず)、その上から「歳 渋表紙(二六・五×一九・○糎)。外題なし。右上に「⟨□/冊⟩

に蔵書票「A16/7/1/R.U.L.」貼付。 に日宗大學の蔵書票「部:B/號:311/冊:1全」貼付、右下 最初の四丁のみ、

「京

一上/易下ノ三」と朱書

(「歳一上」は朱線で見消)。 表紙右上

朱陽円印「察常書籍/寮外不出」(『山門秘傳見聞』の第二十五 丁裏にも捺す)。『山門秘傳見聞』第十一丁表四~七行目にのみ

で返点・区切点・合点・批点・朱引を施す。

貞松蓮永寺寄贈」、 『山門建立秘决』 内題下に朱陽方印「大正五年八月二十五日」 朱陽方印「貞枩文庫」(現静岡市葵区沓谷の

日蓮宗寺院・貞松山蓮永寺旧蔵)。

本が知られるが、未見である。 蔵本などが、また寛文九年の刊記を持つ本として、大谷大学蔵 ハーバード大学燕京図書館蔵本、京都市・瑞光寺

他に慶安四年の刊記を持つ本として、龍谷大学蔵本、

明徳院

本を多く刊行していることがうかがえる。『〔天台三大部会本〕』 衛門の刊記を拾ってみると、仏書の中でも特に天台学関係の版 仏書を多く刊行している。『江戸時代初期出版年表』から庄右 慶安四年の刊記にみえる庄右衛門は、 京都・寺町三条上町で

界章』(正保四年十二月)、 湛然述 『法華玄義十不二門』 (正保四年七月)、最澄撰 『守護国 (寛永十五年正月)、『天台円宗四教五時西谷名目』(正保二年七 (正保四年一月)、智円述 『天台四教儀備釈』(正保三年七月)、智顗説 有厳注 『顕性録要文』(正保四年六月)、 『玄籤備撿 (慶安元年六月)、 『金光明経玄

『十如是義私記』(慶安二年十二月)などは、庄右衛門

いるが、この藤田了竹の父が庄右衛門にあたる。冠氏作成の

年の前年に藤田了竹

(庄左衛門)

から百四点の版権を買取して

ものも刊行されているのは興味深い。法華宗門書堂は、

月)などの刊行が知られるが、主には天台関係の書物を扱って 論疏』(寛永十九年三月)や日蓮の『録内御書』(寛永二十年正 の刊行した天台関係書である。天台関係以外でも、

肆の合資による「法蕐宗門書堂」については、 衛門の一連の出版事業の中に位置付けられよう。 いたようで、『山門建立秘决』 方、寛文九年(一六六九)正月の刊記にみえる、 『山門秘傳見聞』もそうした庄右 冠賢 一氏の研究 京都四書

に詳しく、元禄九年(一六九六) 宗門書堂版に相当することが明らかになっている。 元「四軒仲間」として収録されている八十六点の版本が、 刊 『増益書籍目録大全』 冠氏の調査

堂は寛文九年正月に百三点、 台学書を一挙刊行している。こうした短期間での大量出版の背 によれば、本目録に未収録の現存版本も含めると、 翌十年正月に二点の日蓮宗学・天 法蕐宗門書

いる。そうした中で、本書のような比叡山の堂塔を主題とした 景として、氏は江戸前期に各地に創設された日蓮宗檀林におい て、天台学を重視した修学課程が組まれたことなどを指摘して

- 171

覧表を参照すると、法蕐宗門書堂版には他にも『録内御書』な

なお、本書が近世において活用された形跡として、近世版本に ど、元々、庄右衛門が持っていた七点の版本が含まれている。

おける引用例を二点、挙げておく。日栄撰・享保十七年(一七

三二刊 『修驗故事便覧』巻第四は、「山門秘決ニ曰」として、

また、韶澄 止観院地引の際に比良明神が翁として現じた話を引いている。 (荷香庵主人摩訶三毒)撰·天保四年(一八三三)

神社佛閣攻考書册」として関連書籍を挙げる中、「同建立秘決 各一卷合一冊 九月序刊 『比叡山延暦寺小案内記 比叡山坂本山王社小案内記 (外題 「御山のしをり」) の末尾にも、「山門日吉

同秘傳見聞」として書名がみえ、本書の受容が確認できる。

三、『山門秘傳』の伝本

『山門秘傳』 の伝本二本の書誌を紹介する。

○神奈川県立金沢文庫管理称名寺聖教 三七五函六三

原表紙 鎌倉後期写。綴葉装、 (本文共紙)は殆ど欠損しており、 一帖。全二十二丁 修補による台紙

> 存 二・二糎。二丁目初行に、内題「山門 みで、外題は確認できない。一丁目も綴目近くの部分のみが残 六・六×一三・一糎)に、残存した右端部分が貼られているの (遊紙か)。二丁目以降は欠損が少なく、本紙一五・六×一 (秘) 傳」。本文は漢文、

二丁の表・裏のみ六行)、毎行字数不等。 附返点・送仮名・(一部) 読仮名。全文一筆。 字面、 毎半葉七行 約 四. 五.

一一・〇糎。末尾に遊紙二丁。

○叡山文庫毘沙門堂蔵本

毘

・内・九-二|

渋表紙(二一・九×一四・四糎)中央に、白墨で外題 江戸前期写。袋綴装、一冊。全九丁。

冊一〇〇七)。剝がれた見返紙の表紙側中央に、「山門秘傳」と 蔵書票(毘沙門堂蔵、大正十四年十二月寄托、 部数一三四、 傳」直書。表紙左下に同じ白墨で「葱」と記す。表紙右下に、

墨書 は漢文、附返点・送仮名・(一部) (外題と同筆。本文とは別筆か)。内題「山門秘傳」。本文 読仮名・合点。送仮名

本奥書があり、その次行から三行が続くが、そこまでが最終丁 余×一二・○糎。末尾に「本云正安二年庚子五月二日^{毎専}」と 仮名の一部は後補。 毎半葉八行、 毎行字数不等。 字面約一九糎

「山門秘

最終行で、後欠となっている。

同展示図録に高橋秀榮氏による翻刻も掲載されている。しかし、 の「称名寺の新発見資料」展 称名寺蔵本については、古く神奈川県立金沢文庫 (一九九四年)で展示されており、

を復原できるような箇所もある。そこで、称名寺蔵本を底本に 同書では欠損している箇所や、他本を参照した方が本来の本文

称名寺本には奥書がなく、毘沙門堂本の末尾の三行もない。三 を示した(後掲)。称名寺本と毘沙門堂本はほぼ対応するが 毘沙門堂蔵本及び『山門建立秘决』慶安四年八月刊本との校異 して、毘沙門堂蔵本によって対校する形で校訂本文を作成し、

もあれば、毘沙門堂本と慶安刊本が一致し称名寺本が異なる字 者のうち、称名寺本と毘沙門堂本が一致し慶安刊本が異なる字

中には毘沙門堂本・慶安刊本により称名寺本の字を校

訂し得る箇所もある。

四王院・法華堂・常行堂・文殊楼・戒壇院が焼けており(『天 で、永仁六年(一二九八)九月には、 ○○)か、それ以前に成立していたことがうかがえる。ところ 毘沙門堂本の正安二年の本奥書から、本書は正安二年 山内の騒乱により大講堂・

> 再建を志すにあたり、 いるが、本書にはそうした回禄に関する記事がうかがえない。 台座主記』巻五他)、その後の再建事業には三十年余を要して 回禄前の堂舎の由緒をまとめた可能性も

えた方が自然であろうか

考えられなくはないが、永仁六年九月以前にまとめられたと考

現状では判を伴うような序文は残っていないが、 なお、この本奥書では「在判」に続いて「如序」としている。

は序文が附されていたのかもしれない。

あるいは元

四、 『山門秘傳』と『山門建立秘决』 の関係

上」と刷られている点に気付く。そして、この末尾の文章は 名寺本『山門秘傳』に対応し、その第八丁裏二行目の末尾に「已 『山門建立秘决』十三丁分のうち、第八丁表裏二行目までが称 ここで、『山門建立秘决』 版本を『山門秘傳』と比較すると、

以 預||釋尊摩頂|、觀念聴學/窓前=/、 ||今日||信心||、宜為成佛種||。抑願||、受持読誦||室内 蒙山王守護。

という、いかにも本の末尾にふさわしい文言となっている(「自

自他界共期佛惠耳。

他界」は『山門秘傳』写本のように本来「自他法界」とあるべ ①第八丁裏3「問、 一山三塔、 即一心三觀、三身即一一之義也

同)。これは以降の記事が『山門秘傳』に加わる形で増補され、 き。なお、版本の引用に際して、句読点は私に付加した。以下 … 答…」

それも含めて版本化されたことを示唆している。そして、毘沙 答…」 ③第九丁表3「問、

「問。一山三塔、即一心三観、三身一身之義也。若爾、以門堂本『山門秘傳』の末尾の三行は、

本尊,。/答。雖三塔トラート、以両塔,為本也。東西両塔/本三塔/本尊,、可為三身,。何但約東西両塔,、不取楞嚴院

に対応している(後掲の校異参照)。つまり、毘沙門堂本『山となっているが、これは『山門建立秘決』第八丁裏三~五行目

尊者、俱是」(以下、後欠)

る)が増補されて『山門建立秘决』の形に至る過程を示すもの門秘傳』は、称名寺本のような形(仮に原『山門秘傳』と称す

であろう。

ようになる(丁数の後のアラビア数字は行数。「…」は中略・が交じる形であり、各条の最初のみ簡略に示すならば、以下のが可以をできる。のこれ以降の条文は、問答形式と事書形式

後略を示す)。

③第九丁表3「問、四菩薩´体´如何。 答…。」「惠心讃云…」答…」 ②第九丁表1「問、以今三如来」、云壽量´三佛」心、如何。

所表 ¦耶。 答⋯ё≒」④第九丁表10「問、傳教大師御廟、在≒≒東西∵中路 ¦事、有 ;

…。五、…」⑤第九丁裹3「梨下五箇相傳事 一、…。二、…。三、…。四、

⑦第十一丁表5「霊鷲山事。 示云、霊者理也、止也。鷲者光也、⑥第十丁表9「相傳云、於此宗、圓頓戒」云事、有之」。…」

9落十一丁裡7「市云、專效大市卸篇冬寺、可該急大市云、…
8第十一丁表9「尋云、以鷲配惠事、如何。 義云、…」

智也、觀也。…」

⑪第十三丁表6「師云、天台山者、一念三千、々々一念之心也。⑩第十二丁表10「天台山事」示云、…」 示意大師云、…」

⑫第十三丁裏1「師云、此法門^甚深秘蔵ノ法門也。…是紅葉

 \vdots

箱秘蔵義也。」

本文を有していたかは不明だが、④の末尾に再び「ロート」と刷 毘沙門堂本『山門秘傳』の後欠部分が、これら全てに対応する いる点で、①から④までとは異なっている なお、

傳事」や⑥の圓頓戒に関する記事などは、原『山門秘傳』とは 目までの記事を補足的に説明している一方、⑤の「梨下五箇相 で、原『山門秘傳』に相当する『山門建立秘决』第八丁裏二行 考えられよう。というのは、①から④まではいずれも問答形式

られていることに注目すれば、増補は二段階であった可能性も

直接の関わりを持たない内容となっているからである

その関連で増補されたものであろう。ただし、 な問答形式でなく「尋云」「師云」として始まる形式になって て「天台」の字義を説く記事は原『山門秘傳』にもあるので、 霊鷲山や天台山に関する記事が中心で、比叡山を霊鷲山に見立 では十丁表~)に関連する問答となっている。⑦から⑪までは 東西両塔の中路にあって浄土寺と号するという記事(称名寺本 本では十六丁裏~)に関する問答、④は伝教大師最澄の御廟が 答、②③は山王上七社を「三如来四菩薩」とする記事 解釈する記事 ①は一山三塔を一心三観・三諦一諦・三身即一などの表示と (後掲称名寺本では十一丁表に相当)に関する問 ①から④のよう (称名寺

> 比叡山横川妙観院や毘沙門堂に住した天台僧で、『拾珠抄』に 記事がみえる。経海(一二〇七~七六)は俊範のもとで学び、 ⑥の中には「経海僧正"此法門"不習義也」、」という

な時代・環境において増補されたものであろう。 これらの記事は、 年に任権僧正。高橋秀榮氏は任僧正を文永五年頃と推測する)。 経海を一時代前の碩学として想起できるよう

よれば、僧正に任ぜられたのは文永年間のことである(文永三

内容をさらに詳しく解説するような形となっている 建立秘決』の本文に対応する条文が多く、『山門建立秘决』の ここで比較のため、『山門建立秘决』 続いて『山門秘傳見聞』の内容について検討すると、『山門

王権現などを、天台教学から意義付けている(山王権現につい 域の三塔や十五谷、 その前半では、比叡山諸堂の縁起や本尊をまとめ、後半では寺 比叡山に至る東西の坂、 坂本に祀られる山

でに対応する原

『山門秘傳』の内容を少し詳しく述べておくと

の第八丁表裏二行目ま

の関係

Æ,

『山門建立秘决』と『山門秘傳見聞』

ては、大宮・二宮・聖真子を山上の釈迦・薬師・阿弥陀の垂迹

このうち前半では、東塔・西塔・横川の三塔それぞれに法華とする)。

堂・常行堂・中堂があることを述べた後、東塔の九院について、

同じく東塔の無動寺・前唐院・政所、また西塔の宝幢院・釈迦院)・文殊楼・戒壇院・惣持院の順で本尊や由緒を述べる。次に、大講堂・四王院・延命院・法華堂・常行堂・根本中堂(止観

ことを意味する)。

恵大師御廟について順に述べ、続けて伝教大師御廟(浄土寺)堂・法華堂、そして横川の中堂・法華堂・常行堂・如法塔・慈戸して東蛯の無動寺・前崖院・政戸「また西塔の宝幢院・釈迦

重常、ヒ蚁山り九完ニュモば、長登がムニも耳(しこと、慈覚大師の前唐院での入滅後の奇瑞に言及する。

壇院・八部院・山王院・西塔院・浄土院を指し、『叡岳要記』構想した九院、すなわち止観院・定心院・総持院・四王院・戒通常、比叡山の九院といえば、最澄が弘仁九年(八一八)に

院(総持院)に至る東塔の九院を挙げ、これらの堂塔に関する東塔(本院)に限って「本院有九院」として、大講堂から惣持げられている。しかし、本書の前半では、比叡山三塔のうちの

や『九院仏閣抄』といった寺誌においても、この順で九院が挙

以上を確認した上で『山門秘傳見聞』を読むと、記事に重点を置く点に特色がある。

の各段落のおおよその主題を示すため、改行箇所に注目し、改成になっていることは明らかである。以下、『山門秘傳見聞』朝、『山門秘傳』の叙述内容やその記事配列に対応した構

用は、原本においてその標題を示した後、再び改行されている行後の最初の文を抜き出してみる(末尾が「~事」で終わる引

第一丁表2「傳云、比叡山-者、真俗不二、色心一-躰也…」

第一丁裏2「鎮護國家」霊場「者、又」云,,天子本命」道場「・・・」

第三丁裏1「法華常行堂建立」事」

第三丁表1「三塔九院事」

第四丁裹2「仰云、以三塔」當三諦''時′、東塔′是止觀院・・・」第四丁表10「大講堂⁴者、一乗弘通´壇・・・」

第四丁裏8「大揖芸学、耳文学、「真」記述等四丁裏8「大講堂本尊大日事」

第四丁裏7「傳云、天」七星。者…」

第五丁裹8「止觀院本尊定"薬師;事」第五丁裹8「延命院、本尊、、普賢延命、像也…」第五丁表9「以四天"、四教、果上、尊"配當"::」

『山門秘傳 第八丁表6「文殊樓中堂)東 "建立事

第八丁裏5「次戒壇院建立事」

第二十四表7「傳云、

十禅師宮本地、

々蔵尊也・・・」

第九丁表8「次惣持院^鎮護國家/道場・・・」

第十三丁表4「塔」扉」虫食"云…」 第十一丁裏2「楞嚴院」本尊觀音」。事

第十三丁表10 「浄土寺」者、在『東西両塔』中路『・・・」

第十四丁表8「次、東西」中間"被卜+御入定處」故"、 有甚深

第十五丁裏1「東西」坂」上下事」

第十四丁裏4「次、前唐院御入定所、已前"事畢"…」

第十九丁表4「神教-者、是又山王-秘曲也」

第二十一丁表4「傳云、祭禮〕時、七社「御輿『唐﨑御幸作》申『

第二十一丁裏8「問、 何故、大津神人、於,唐崎、遂川彼祭禮

耶 第二十二丁表7「次"、以||三身||配當"色心|、是一箇"配立也

第二十二裏8「釋尊摩頂シテ云ル事/、 仰云、 梶井御所一者、 是、有以故…」 東坂本也…」

第二十四表3

第二十四表5「仰云、大津者、地躰,大途也…」

照・引用しつつ、その叙述順序にならって、 のである。このように、『山門秘傳見聞』

『山門秘傳』 『山門秘傳』

の内

は、

最初の二段落は、『山門秘傳』の最初の一文「夫比叡山者、顕 以上によって簡略ながら各段落の主題もうかがえるが、例えば 各段落の始めに堂塔の名称や主題が示されることが多いので、

密弘通之勝地、鎮護国家之霊場也」について、「比叡山」「鎮護

第十三丁表の「塔」扉」虫食"云・・・」は、慈覚大師円仁が横川 国家之霊場」という詞を抜き出し、解説を加えた内容である。 堂名が明示されていない例について、若干補足するならば、

受けたものである(虫食の文は『叡岳要記』下にもみえるが、 に立てた如法塔の「扉虫食」の文を示す『山門秘傳』の記事を 『山門秘傳』とは若干異同がある)。また、第十九丁表の「神教

は『山門秘傳』称名寺本と『山門建立秘决』は「秘教」とする

社 神輿御出、自社頭 | 、至唐崎松下 | 」という記事を受けたも が話題になっているのは、『山門秘傳』の「御祭之時、者、七 名寺本では第十六丁裏に相当)。第二十一丁で山王七社の祭礼 が、毘沙門堂本が「神教」とする記事を受けたものである(称

- 177

いう書名からしても、『山門秘傳』に関する「見聞」であるこ容を説き広げ、補足したものとみられる。『山門秘傳見聞』と

とを示している。

読誦 事のうち、 これを受けた記事と考えた方が自然である。 が地蔵であり、 で③として示した四菩薩の体に関する問答では、 では、十禅師とその本地である地蔵の利益について述べるが、 いるのではないか。また、第二十四表の七行目から本書末尾ま の記事で、第二十四表では梶井御所について述べているが、原 引用した原 聞』第二十二裏に「釋尊摩頂シテ云ッ事ヘ」とあるのは、 本文に基づいて叙述された可能性が高い。前掲の られたのではなく、『山門建立秘决』のような形に増補された 。山門秘傳』では直接には梶井御所に言及していない。 増補記 ただし、『山門秘傳見聞 『山門秘傳』では、山王の四菩薩として十禅師を挙げる以外 十禅師に関する記事はない。一方、増補記事のうち、前節 ラ室内ニハ、 前節で⑤として示した「梨下五箇相傳事」を受けて 『山門秘傳』の末尾に相当する一文「抑願^、受持 預 六道の衆生を化度する利生について述べており、
 |釋尊摩頂|-| に対応している。一方、その後 は、 原 『山門秘傳』に基づいて作 十禅師の本地 『山門秘傳見 前節で

> 時期を考えると、 特定し難いが、「弘安」昔」の霊験を語ることができるような 記事がある。新たな関連資料が見出されない限り、 放『三尊』神光』、二本杉『被』示『影向』」(第十五丁裏)という 想起できるような時代・環境において原『山門秘傳』 したことになる。『山門秘傳見聞』 れたと推測したが、『山門秘傳見聞』は当然、 前節では、 (伝教大師の御持仏の生身弥陀)について、「弘安」昔、、 経海(一二〇七~七六)を一時代前の碩学として 室町時代以前の可能性が高いのではないだろ の中には、 それ以降に成立 浄土寺安置の本 成立時期は が増補さ

六、おわりに

うか。

えること、などを指摘した。また、あわせて『山門秘傳見聞』り、『山門建立秘决』の前半部が原『山門秘傳』にほぼ対応すること、増補の過程が毘沙門堂本『山門秘傳』にほぼ対応すること、増補の過程が毘沙門堂本『山門秘傳』の末尾にうかがること、増補の過程が毘沙門堂本『山門秘傳』の記事が、称名本稿では、慶安四年八月刊『山門建立秘決』の記事が、称名

門建立秘决』のような増補後の本文を元にした「見聞」と推測 『山門秘傳』を説き広げ、補足した内容となっているが、『山 『山門堂舎』に比べると、取り上げている堂塔の範囲や情報量は、

十二年(一二七五)以前に成立した承澄撰『三院記』及びこれ 比叡山諸堂の寺誌として鎌倉期に遡る古いものは、まず文永

されることについても言及した。

四年 とほぼ同内容の『阿娑縛抄』第二百一・諸寺略記下がある。ま 同じく鎌倉中期頃の成立と推測される『叡岳要記』、元亨 (一三二四)の杲鎮の口述を永徳三年(一三八三)に重記

仮託の巡礼記や『運心巡礼秘記』二巻がある。ただし、これら 曼荼羅世界として意義付ける『當山巡礼霊所法施記』等の円仁 な記録として知られる。他に鎌倉期の関連書としては、寺域を した『九院仏閣抄』、応永二十四年(一四一七)の奥書を持つ 『山門堂舎』(山門堂舎記)などが、信長による焼討以前の重要

塔にわたる体系的で詳細な寺誌である『叡岳要記』『九院仏閣抄』 響力を保った点でも、一定の意義を持つものである。比叡山三 派生した点や、『山門建立秘决』として版本化されて近世に影 成立した寺誌として注目され、 こうした中で『山門秘傳』は、正安二年(一三〇〇)以前に 『山門秘傳見聞』のような本が

は諸堂の本尊や歴史的経緯について詳しいものではない。

東塔を中心とした限定的な内容となっているが、 に関する説話的な記事も幾つか含まれている。 堂塔の由緒等

常行堂本尊の弥陀像の中に納められたという伝承がみえる。 が唐から帰朝する際に波の上に出現した金色の弥陀像が、

ここで説話的な記事の一例を挙げるならば、

本書には

円仁

円仁の帰朝の船中に摩多羅神が影向したという『渓嵐拾葉集 舎記』や延慶本『平家物語』 の類似記事との関係を述べた上で

本ひろ子氏は毘沙門堂本を用いてこの記事に言及し、

巻三十九の説を、この伝承の異伝として論じている。本書のこ

波音がこれを唱えるのを聞き、見ると波上に金色弥陀像が現わ 伝の引声念仏を行った際、「成就如是」の「終音」を失念したが の一節では、円仁が帰朝の舩上で法道(正しくは法照)

尺八で引声の阿弥陀経を吹き伝えたが、 れたことが記されている。 ところで『古事談』三―一三話には、 「成就如是、 円仁が音声不足のため 功徳庄厳

うになったという説話がみえる。海中か常行堂か、場は異にし ノ音ヲ加ヨ」というお告げがあり、「如是ヤ」と加えていうよ という所を吹くことができなかった際、常行堂の空中から「ヤ

『山門秘傳』 の話は 『古事談』三―一三話の異伝とみ

て良いだろう(「終音」は「ヤノ音」に相当するか)。『帝王編 つつも、 注 1

年記』や『真如堂縁起』にみえる、『古事談』三―一三話の類

じだが、例えば『帝王編年記』では阿弥陀三尊が出現して「成

話は、場面が帰朝の舩上となっている点では

『山門秘傳』と同

就如是也節」を伝えたとするなど異なる点がある。『帝王編年記

たことは、説話展開の様相としても興味深い。 や『真如堂縁起』に先立って、比叡山にこうした形の説話があっ

2

勝野隆信「慈覚大師入定説考」(福井康順編

『慈覚大師研

究

(続群書類従完成会)参照

このように、『山門秘傳』 には鎌倉後期に遡る寺誌としての

周辺、 すべき記事が幾つか含まれている。また、比叡山の寺域やその 価値がある点は勿論だが、加えて、説話研究上においても注目 日吉社を天台教学から解釈する記事も豊富である。以下

に示した校訂本文を御活用いただければ幸いである。

5 4

費 JP16K02394の助成を受けたものである。 になった方々に、 書誌調査に際し御高配を賜った諸機関、 感謝申し上げる。なお、本稿はJSPS科研 及びお世話

> 任記事の「印鎰」返却に関する注や、 『平家物語證注』における巻第二・西光沙汰の明雲座主辞 『神皇正統記注解』

立秘訣」として引くのは本書であろう。 における嵯峨天皇条の「八ノ舌アル鎰」 『御橋悳言著作集 の注に、 「山門建

教大師と天台宗』吉川弘文館、 天台学会、一九六四年。後に、日本仏教宗史論集第三巻 一九八五年、 に再録)

Ⅱ近世篇Ⅰ』清文堂出版、一九八三年)。 入間田宣夫「中世の松島寺」(『宮城の研究 第3巻 中世篇

3

見聞』と合綴合一冊で、 大谷大学図書館古典籍データベースによれば、 外題「山門建立秘决」 (書題簽)、 『山門秘傳 佐々木馨 『中世国家の宗教構造』 (吉川弘文館、一九八八年)。

高二一 · 九糎 題簽横に「山門秘傳見聞 合」とあり、 縦二五 ・九糎、

冠賢一『近世日蓮宗出版史研究』(平楽寺書店、一九八三年)。

7

6

『江戸時代初期出版年表』

(勉誠出版、

二〇一一年)。

8

書名と冊数、

整理番号、

外題、

内題は、

叡山文庫調查会編

ている。【叡山文庫毘沙門堂蔵識語集成』(二○一六年)に掲載され

論集』三九、二〇〇八年十月)。
高橋秀榮「妙観院の碩学経海の行状」(『駒澤大学仏教学部

10

以下、山門記録については、景山春樹『比叡山寺 - その構

三塔諸堂沿革史』(叡山学院、一九九三年)等参照。山の諸堂と霊跡」(法蔵館、一九八七年)、武覚超『比叡山成と諸問題』(同朋舎、一九七八年)、『比叡山』「六、比叡

11

これらの巡礼記の伝本とその性格については、拙稿「比叡

12 (『異神』「摩多羅神の姿態変換―修行・芸能・秘儀―」平凡社、

一九九八年、一一九頁)。

記研究』第二集、二〇〇五年九月)で言及したことがある。山の巡礼記と記家―根本中堂前の竹台をめぐって」(『巡礼

○五年)。『古事談』の本話については、深澤希望氏の御教新日本古典文学大系『古事談 続古事談』(岩波書店、二○

示を得た。

13

『山門秘伝』 校訂本文と校異

底本には、神奈川県立金沢文庫管理・称名寺聖教『山門秘傳 を用い、校訂本文を上段に、底本の本文注と対校本との異同

発見資料』(神奈川県立金沢文庫、 及び校訂注を下段に示した。底本については、『称名寺の新 一九九四年)所載の翻刻

対校本には、叡山文庫毘沙門堂本『山門秘傳』、及び『山門 略号で示した。『山門建立秘決』慶安四年八月刊本については 建立秘决』慶安四年八月刊本を用い、前者を興、後者を邸の も参照したが、改めた字も多い。

た印面を底本と対校する必要上、印字と墨の書入れ(主に訓 西尾市岩瀬文庫蔵本を主に参照した。ただし、書入れを除い

訓点や振仮名、送仮名の相違は、原則として校異に含めてい 点や送仮名)を区別する際に、本稿に挙げた他伝本も参照した。

ない。ただし、本文漢字の異同を示す際、対校本に付されて いる訓点等も共に示した場合がある。また、正字と略字体の

相違や、「釈(釋)」と「尺」、「法華」の「華」と「花」、「萬

本文の異同及び改補に関する校異で、その同一行に属するも

と「万」の異同については、省略した。

のは○記号を挿んで連記した。

形かと推測した箇所については、対校本によって本文を補 と異なる叡山文庫毘沙門堂本など対校本の字句の方が本来の 称名寺聖教 『山門秘傳』において欠損している箇所や、底本

・校訂本文には、私に句読点と並列点、人名比定(右傍括弧内) たり改めたりし、その旨を注記した。

を補った。異体字は通行の字体に改め、合字は開いた。底本 の形に対し、訓点(返点)は追加していない。

に注記した。また、底本に存する抹消箇所は校訂本文には示 補ったために行が増えた二箇所は、その旨がわかるよう下段

行取り、小書は、底本の通りとしたが、対校本により本文を

んだ。 さず、挿入記号を用いて文字を補った部分は、本文に入れ込

した。 底本に従い、各丁の表裏の区切り目を」(二オ)のように示

夫比叡山者、顕密弘通之勝地、 鎮

護国家之霊場也。佛法王法如車

三塔。所謂、東塔,号本院,、西塔,分号宝 二輪,故一、以此山,号、比叡山,一山一有

三一霊場」。名法花堂、常行堂、中

又、本院有九院。一、大講堂。深草天 堂」。合写三塔九院也。

王御願也。本尊、大日如来。於此堂。

被修二季竪義」。夏竪義七个日

号六月會。有勅使、々々者時弁官也。 以六月四日為終。傳教大師御忌日也。

<u></u> (三ウ)

【以六月四】底本欠損、凰⑩ニヨリ補フ。

冬、竪義、十个日、以十一月 廿四日為終」。天台大師御忌日也。 号

一者、四王院。文徳天王御願也。

霜月會一。

▽本文注・異同・校訂注

【秘】底本欠損、 ® 毎 ニヨリ補フ。

【之】底本「也」ヲ見消ニシ、右ニ「之」傍記。

【此山】底本「山」字欠損、凰鰕ニヨリ補フ。

幢院 「、横川 ット号楞嚴院 「。三塔 '各有 」 (ニオ) | 【各】 興ナシ。

【常行堂、中堂】凰「中堂常行堂」。

【王】嫐「皇」。○【日】底本欠損、 凰嫐ニヨリ補フ。

|个|」 凰殿 「箇」。

[个]」 凰嫐「箇」。 【有勅使~弁官也】底本ハ前行「傳教~日」ノ右傍行間ニ記ス。凰⑱ノ位置ニ従フ。

之刻、 五者、常行堂。慈覺大師帰朝 師御自筆法花経也。 坐禅床、于今不断絶。大師御發 其後、結十二人禅衆、相續。大師 于時有聲、誦安楽行品。大師 有御失念」。于時波音唱之、 傳引聲之時、成就如是終音 共行法花云。 本尊、天台大 願云、我盡未来際、在十二人中! 茲、大師其處立法花堂,、行常坐三昧 々々云、我是汝前生」古骨也云。因 尋聲,、行向亞其処,、有可古髑髏。 無人時、始結草庵、修行法花」。 在講堂北一。傳教大師、昔當山 在大講堂一東一。四者、法花堂。 本尊、普賢延命像也。 三者、延命院。朱雀院御願也 尊,金銅立像四天也。在講堂西一。 於舩中| 誦法道和尚相 聞 | (三ウ) 」(三才) (四オ) 【終】底本「纔」、凰鰯ニヨリ改ム。 大師』凰ナシ。 【本尊】凰飏「本尊者」。 【行常坐】底本「行°坐」、右二「常」傍記。®「行法華」。 【☲】 興ナシ。 颲「☲」。 ○ 【古】 興ナシ。 【于】・・○【大師】底本「大師法花」。 (無) 嗯「无」。○【結】 嗯「立」。 【本尊、普賢延命像也】底本ナシ、凰飏ニヨリ補フ。タダシ、【也】鰯ナシ。 【銅】」 颶「剛」。○【講堂】 颶「大講堂」 瞼「大佛堂」。 【床】⑱「處」。○【今不断絶】底本「今'断絶」、右ニ「不歟」傍記' 【我是】 ⑩ナシ。 【前】 聰 ⑩ 「先」。

時、 傳教大師、為立此止観院、 法之行、長日不退之勤、併祈 皆所知,也。半行半座行儀也。顕密二 本尊、傳教大師御作、生身薬 佛、正月修正、毎月例時、従昔已来 法花堂南一。七月一庭立、八月一大念 十四人禅師中二、共行之」 話念。當堂在 昧,。結十四人禅師、相継不断 中"納彼金像"、始行常行三 即有御覺悟。因茲、御覧スルニ、波上 □之時、白髮老人来云、我見此湖 福祐。昔 天長地久御願、 師如来也。号生身如来「事、世以 未曾断絶」。六者、中堂。号止観院 有金色弥陀像。低了頭奉請也。 立『常行堂』、本尊阿弥陀像 尊像即来〈『大師御袖』。其 大師御願云、我盡未来、在 資万民快楽 令相地 (五オ) 【以皆】 凰鰯「皆以」。 (四 ウ) 【継】 ⑮ 「續」。 【相】嗯「相」ノ上ニ「掃」ト重書。⑮ 【地久】⑮「地久之」。 【半行半座】底本「半°行儀」、右二「座歟」傍記。® 十】底本欠損、 阿 也。即哪一之」。 【□】底本欠損、⑱燭ニハ該当字ナシ。○【湖】底本「潮」、啂燭ニヨリ改ム。 【絶】底本欠損、 【金】 凰「金色」。 凰 以。 凰瞼ニヨリ補フ。○【之】凰ナシ。○【當】瞼「常行」。 凰伽ニヨリ補フ。 0 願 弖 凰燭「発願」。○【未来】凰「未来際」。 「半行半坐」。

海七度成陸、 成海。 即比良明神也。 (五ウ) 【海】底本欠損、 ®飯ニョリ補フ。

建立堂舎之地形、此処最勝也。佛

法弘通可久景。被所相地者、今止

観院地也。其後、欲引平地、人力難及。 爰、

色雲覆山」、諸天降地」、護法善

神同心与力》字、不経時日,、引平地 - 畢素。

彼地中「有銀八舌」鎰」。大師御入唐

大師一御経蔵之由、 之時、登天台山」、可奉開見天台 被望仰。然而

- (六オ)

此経蔵、天台大師御存生之時 被立之後、不被開之。又無其鎰。 就

天台大師御遺言云、我滅度

身ナルヘシ云。 沙門来、以可開之。彼沙門、、即我 仍 輕非可*!開御経蔵。 况

無経蔵鎰、争可開戸云。大師言

我持鎰、以之欲開。 覧云。爰知、大師即天台御身也 持八舌鎰、開御経蔵、悉以御披 然後、以御所

代々座主相傳ジテ于今有

[鎰] 僶 「鍵」。

【欲】底本ナシ、⑱慟ニヨリ補フ。○【人力】底本「分」、慟慟ニヨリ改ム。

【色】 即「五色」 颇「紫」。

| 然而 | ® 「而 」 ® 「然 」。

【経蔵】 凰劔「御経蔵」。〇【存】 凰劔「在」。

【鎰】廛「鍵」。【就】底本「付」、廛똃ニヨリ改ム。

【滅度】即「滅度之」。

【身】 ⑮ 「後身」。

【鎰】 ® 「鍵」。○【御】 ®ナシ。

」 (六ウ) 【経蔵鎰】 嗯 「鍵」。○【争】底本「常」、嗯⑱ニヨリ改ム。○【可】⑱ナシ。○【言】⑱云。

[云] ⑤ 「畢x」。○【知】⑥「以」。○【御身】嗯「御後身」。 【御披覧】 啂「御被覧」 ⑱「被披覧」。

時、宣命勅使^##*、於大講堂 」(七才)益,送,御経蔵、次)座主補任之之,。座主御辞退之時者、此印	【主】®ナシ。 【鐘】®「輪」。○【次/】®「以」。
庭開宣命之後、被請取此印	
鎰。誠是山門重寳也。	【鎰】 興「鑰」。
七者、文殊樓。是、非行非坐行儀也。	【非行非坐】底本「非行。坐」、右二「非」傍記。
在中堂東。	
八者、戒壇院。傳教大師御相傳、	【大師】 興ナシ。
円頓戒壇也。六十余州僧徒、受っト	【余州】 ⑱ 「余州之」。
大乗妙戒『、在此戒壇』。 」(七ウ)	
九者、惣持院。鎮護國家道場、将	【将門】 僶 「山門」。
門調伏處也。已上、本院内之九院佛	
閣也。此外、本院南山、号無動寺。	
相應御本尊、生身不動在也。	也」即哪「之」。
又、慈覺大師御遺跡、号前唐	
院。在中堂北台。天台一箱在之一。又、	【天台】 曍ナシ。
當四王院東」、有政所」。本尊、傳 」(八オ)	
教大師御作大黒天神也。止観	
院内、北礼堂内陣、有傳教	【北】曍「此」。○【陣】僶「陳」。

法花・常行両堂」。	中堂本尊、十一面観音也。又、有	細」。次、楞嚴院、九条右相府建立也。		号尺迦堂。又、法花堂、常行堂、有	仍、自彼天人降臨一昔 已来、以之	住壽凝然無去来ぶ。	因縁果満成正覺、	恆沙福智皆圓満、	敬礼天人大覺尊、	散花而礼云、	事、世以不知之。爰、天人降臨シテ、 【世	形像、同止観院本尊故、尺迦像云	次、寶幢院。中堂尺迦堂也。本尊 「(ハウ) 【堂】 ⑱ナシ。	房々霊佛、依繁畧之。	頂。即四谷中央也。谷々聖跡、	沙門堂」。此等堂々者、在本院山	大師御作等身毗沙門、号毗 [
		【右相府】⑱「右承相」。○【建立】⑱「御建立」。	【本院行儀】 ⑱ ⑱ 「如本院行儀」。		【仍、自彼】⑱ナシ。		【縁】 ⑱「円」⑲「圓」。		【天人】底本「天」ノ下ニ墨滅跡アリ。	【而礼云】⑱ナシ。	【世】 卿ナシ。		里】 興ナシ。	【畧之】慮「畧之、已上」。			【大師】嗯ナシ。○【等】⑱「生」。○【号毗沙門】⑱ナシ。	

慈覺大師、於椙洞二、修如法書寫

」(九ウ)【於】曍「出於」。

行始処也。以彼根本椙一本,、立塔,。 々₎

扉虫食云、有人得見此塔、礼拝供

當知是等皆近阿耨菩提派令。

慈恵大師御廟。自余霊場、不能(魚源) 此塔、即中堂右前也。又、當院有

又、傳教大師御廟、 東西両塔中路二

(十オ)

唐院御入滅云。爰、自御館飛出、

日其時、至出羽國家。仍、御忌日正

八講。自余大師御事、不能委細。

別傳尋可見之。

依正真俗、皆相應法也。故歷諸

事。悉有所表。所謂 一心三観、三諦一諦、三身即一、一心即 一山三塔二、表

三。三千學窓へ、

東西両塔、

各四谷、横川七谷シテ、 顕一念三千、々々一

月十四日二、於御遺跡前唐院、被修 行東方、御草鞋落花方峯。其 号浄土寺」。慈覺大師者、於前 -(十 ウ) 【別傳尋】凰쏎「尋別傳」。

歴 ・ 「暦」 ・ 「暦」。

【塔】底本「谷」、凰陽ニヨリ改ム。

【三】嗯「三身」。○【三千】⑱「々千」○【窓】嗯「索」。○【々々】颲「三千」。

【三諦】底本ナシ、凰燭ニヨリ補フ。○【一心】凰嫐「々心」。

「始」◎「給」。○【相】 嗯

【有人】 凰圆 「若有人」。

【當】 興鰯ナシ。○【等】嗯「人」、タダシ右ニ「等イ」傍記。○【キェ゙】嗯「ൎュ」鰯ナシ。

【中】⑩ナシ。○【又】⑩ナシ。

恵

【東西両塔中路"有】凰飏「在東西両塔中路"」。

【云】 凰 飯 ナシ。 【花方】⑩「華芳」。

十五谷也。是十五智断表。三塔

各、有法花・常行・中堂」。三々九諦 」(十一オ

円融三観也。三堂如次空假中也。

品浄土、九界佛性也。号中堂事、谷々,以行儀,、可知之,。九院佛閣、又是九

師如来。西塔中堂、尺迦善逝、十六王子、初中故也。又是中道也。東塔中堂、薬

後如来也。尺迦在西、顕即弥陀故、

両院中堂本尊〉、薬師·尺迦·弥陀

一 (十一ウ)

。即是両所三聖、本地本門壽量

三佛也。山、是、常在霊山之諸法

實相

〉峯也。若付『密教 l 、示此義』、

山也。一山九烷、金剛九會、抬蔵五一山三塔/三密同躰、三部不二之

山也。一山九院、金剛九會、胎蔵九

拳、東西因果曼荼羅也。楞嚴 尊。東西両塔四谷´、両部五智霊

密無盡荘嚴身土、豈非此山,耶。 七谷´、顕金胎不二、瑜祇深秘。本有秘

凡

一山十五谷、十六薩埵、本有修

【十五谷也】嗯「合十五谷」慮「合十五谷也」。○【是十五智断表】嗯慮「是表十五智断」。

【中也】 ⑱ 「中」。

【行】底本、擦消跡の上に重書

【々」、凰ナシ。

「戸堂」、底ドトノ。『夏のニョリ浦フ。

【故也】颶「故」。○【又是中道也】飏ナシ。

【中堂】底本ナシ。凰燭ニヨリ補フ。

【中堂】 圖「中一々堂」。

「霊山と、「鬼」「霊山と山一ゆ「霊山ノヤ

【霊山之】凰「霊山之山」勴「霊山」々」。

【實相/】⑱「實相之」。○【示】底本、擦消跡ノ上ニ「示」重書。⑲戀

(密) 📾 「山」。

【蔵】晦ナシ。

【尊】⑱⑱「尊也」。○【四谷】底本「四塔」、⑱ニヨリ改ム。嫐「両谷」。

秘 【顕】底本ナシ。⑩⑱ニヨリ補フ。○

祇

⑩伽。

【豈】⑱慟「是」。○【耶】唧慟「哉」。

凡圆元。

生妙躰、内證般若法曼荼羅也。

委細可思之。

又、當山'有東西坂。自山上至西坂下,、

華夷諸人、登山之時、従京都至

山¦也。洛中"有河、顕生死愛河」。坂下山下」、翻五道流轉忘"-心」、向發菩提心

堂。勧發菩提心」、為断四魔障」也。有河」、示菩提彼岸」。今此山下、有不動

惑修善、誠有憑。渡此河者、洗除見我身者、發菩提心、聞我名者、断

有佛性 | 。設雖無顕益、誰不預無始之罪垢、趣此山者、顕得本

十丁也。過於五百,、至於寳所,、坂冥益耶。自坂本至佛閣中路、五

有貫首御所 ˌ、三百由旬化城、以中''有息所 ˌ。号水飲 ˌ。有雑人息所

界」、断三或」、盡、三忘」、超。三三祇」、登之可知」。山路中途、凡三里也。出三 」(不事』『私見』 「三正正代十九一】

【生】⑩「行」。○【内】卿「円」。○【荼】卿ナシ。

【自】 ⑩ナシ。○【上】 興ナシ。

五十丁。自西坂下至京中、五十丁也。」(十二ウ) 【(行頭ノ) 丁】®「丁也」。

【忘゚゚ー心゚】®「妄゚」。○【菩提心】®®「菩提心之」。【華夷】底本一字目欠損、®ニョリ補フ。®「幸哉」。

【誠】 璺⑱「誠以」。○【除】慟「浴~」。

【發】 個ナシ。

」(十三才)

【無】 僶 「无」。

[耶] 卿卿ナシ。○【本】卿「下」。

【於】 ⑩ ナシ。

【御所】 凰「御息所」。

「界」底本欠損、®®ニヨリ補フ。○【三或】「三」底本欠損、®®ニヨリ補フ。○【忘】®®「妄」。

菩提心山二、顕ハワー本有覺躰フ、亦以可知」。 山圖『上』。

無盡荘厳無窮万徳、以言,難盡,、

以心 | 難測 | 。東坂下 二、七社権現王

子眷属、社壇嚴重ニシテ、霊験殊勝也。 自山頂 | 至坂下 | 、廿五丁也。離五々

東坂下有社壇」、号早尾権現。

生死 |、得^*五々三昧 |、修行道路也。

」 (十四オ

本地不動尊也。其利益例》,西坂

下一、可知之一。凡、東西坂上下、

従因

至果,、従本,垂迹,云也義、可知之,。又、従

丁石橋。預和光同塵利益」、歸本地 大宮御前出大坂 | 之時、其路有三

伏三惑、頓"超三忘,表示也。

寂光大道,中路也。故三丁石橋、、円一」(十四ウ)

問。依此等義,、以當山,霊山説法花

答。経云神力品、 當知是處即是道

處一可云耶。

法花流布處、 諸佛於此轉於法輪等文。 何山何里立、非成道

【殊勝也】⑩「殊勝ナワ」。

【有】 ⑩ 「在」。

【尊】 ⑩ ナシ。

[上] ⑩ナシ。

【云也義】興ナシ、嫐「義」。○【知】興働「思」。

【大宮】 ®「本宮」。

【寂】【大】底本欠損、⑱慟ニヨリ補フ。○【丁】慟「町」。 【丁】嫐「町」。○【預】凰ナシ。

【伏】底本欠損、®®ニヨリ補フ。○【忘】®®「妄」。

【霊山】 凰 嫐 「 即霊山 」。

【神力品】 ໝナシ。

【何山】⑩ナシ。 [等] 興ナシ。

説法砌"耶。 何况記一一、尺字王城耆山,」(十五オ) 【耶】凰圖「哉」。

云、既云、山即法性广、正因法身,,。余之

二徳准諸文 | 説

報是故約之、以観正報立。法性寂 又、約山為観,者、 山城雖異」、同是依

光山、 依正不二、三身四土円融相

即一処"聞》"。決一尺天台山,云、天 儀既判、清而為天、濁而為地。此即 台者巓也。元気未分、混而為一、両 一 (十五ウ)

地分野應天三台故、以名焉云。只 俗名且依俗一尺七八、台者星名也。其

相即、一身三諦、本常寂光、其 點一法二諦宛然、一心三観、三身

之。就中、當山一山三山也。 是同。又、王城山王二名一致也。可思」(十六オ) 旨分明也。三國雖異山、其義 山形即

教所談、 山説法花處、文義共無相違。 山字也。字訓義可思之。三國霊 亦可同之。准前、 可知而已。

既圆。「決」。

【説】 ⑩ナシ。

又圆「又説」。

(文) 凰ナシ。

【聞〃,】 颶「同也」。○【決二】 興「決一云」。

【台】【巓】底本欠損、⑱⑱ニヨリ補フ。⑱ハ「巓」ト送仮名ヲ伴フ。

【三台】嗯「三台星」」。○【名】嗯「為」名」。○【云】嗯ナシ。⑱「文」。○【只】⑲「唯」。 【儀】∞「義」。○【判、清】底本欠損、®ニヨリ補フ。∞「別清シシ」。

【點】嫐「黙」。○【三観】凰嫐「止観」。

【思】 僶 「知」。 【雖異山】 凰 飯 「山雖異」。〇【義】凰「儀」。

【字訓】⑱「訓」。○【霊山】⑱「霊山霊山」トシ、後ノ「霊山」ヲ丸デ囲ミ抹消。 三」圖「王」。

【無】

®「无」。○【秘】

®「神」。

【亦】 ®ナシ。○【已】 ®ナシ。

山王権現者、 円宗守護一神久住へり

如来者、大宮権現,尺迦如来、 當山"尋本地"、三如来四菩薩也。三 聖

方一所御坐。地主権現薬師如来 真子権現弥陀如来。此両社、

名両所三聖」。本地東西両塔一本

是別"御坐、号二宮方」。故"此三社

光一山頂出土、、同居樹下二、守円宗人 垂迹、両所三社和光也。 自寂

法。、示如来知見。御詫宣云、樹下和 」(十七オ)

度不詣我寳前」、何知生死盡不

光同塵事、二度其事皆已畢。今

菩薩引導了。凡、 盡,文。我等既預和光利益二、何疑ハム 山者、

依報三諦一諦也。

王者、正法一諦三諦也。依正不二シット、寂

光身土也。両塔三尊、 両所三聖、三

宛然云也。四菩薩者、客人権現今、大宮 身一身、々々三身、只點一法二諦、 十禅師権現了、二宮方御坐。 」(十七ウ)

方"御坐。

【御】底本欠損、⑱嫐ニヨリ補フ。○【如来】嫐ナシ

」(十六ウ) 【者、大】底本欠損、⑱⑱ニヨリ補フ。○【権現宀】唧「権現者」。

【権現】 ⑮ナシ。〇【如来】 ⑱ナシ。〇【社】 ⑮「神´」。

囚 ⑩ 「正」。

所

⑩ 「處」。

【其事】⑩「其中」。○ 【皆】 嗯 「既」。

【文】 凰ナシ。 【何】 即ナシ。

【導】⑩「道」。○【也】凰⑩ナシ。

【法】嗯௵「報」。○【三諦也】嗯௵「三諦ゥゥ」。

【一身】底本欠損、 【云】 凰 飯 ナシ。 凰∞ニヨリ補フ。○ 只愿

【御坐】底本欠損、凰⑱ニヨリ補フ。

賤上下、忌触穢不浄、運清浄信 」(十九オ)	相交,、凡聖雑居同居行相也。貴【同居】卿	高僧住房、住侶宿所、男女住宅、 【房】⑱慟	十如十界也。六个条内、貫主御所、 【个】 ⑱ 郻	六个条^六趣昏衢、六百家^所具 【个】®	開三顕一』。坂本六个條、六百家也。 【个】 ⑱	卯月中申』、為正一。前三後一表	利生儀式也。御祭日数四个日、以 」(+八ゥ) 【个】⑱Ց「箇」。○	唐崎松下一。是即、出同居説法【是】卿	時,者、七社,神輿御出、自社頭」、至	帝網、土、在『眼前』不遠』。御祭之	御正躰、千万光明互"渉入、重々	壇、在山本草。 寶殿 / 荘厳無雙也。	中七下七、社壇、、皆是王子也。社【中七】⑱「七」。	身、三諦二諦、豈異之哉。上七社´外、」(+八ォ)【二諦】⑱ナシ。○【豈】⑱「是」。	垂跡『三聖也。二三、義同之』。三身二 【跡』】 卿	尋^三所也。両塔本尊^三佛ケゥ。両所	山頂"御坐。御在所、大分,両所也。委	八王子、三宮´、二宮方、八丁′坂ッ登៉ 【丁】⑱ 「町」。
	【同居】凰圖ナシ。○【貴賤上下】卿「去;貴賤上下」圖ナシ。	「坊」。	「箇」。	> 1	⑱繳 「箇」。		「箇」。〇【以】⑱ナシ。	⑱「永」。					「七」。	ナシ。〇【豈】興「是」。	【跡』】⑱「迹√」。○【二身】⑱ナシ。			町。

心」、参詣往還、日夜無絶□宀。出離生死	【心】 ⑮ ナシ。
因縁、頗同在世利益」。又、湖海浮	
舩」、上下往来、。生死大海、菩提)彼岸、	
在目前,、可見ッ。海邊有三濱,、豈	【豈】卿「是」。
非衆生到岸儀哉。静思此事」、	【衆生】 僶「永」。
叡山常在霊山本土、山王本地、無	【叡山】⑱「比叡山」。○【無】唧「无」。
作三身也。本土、衆生本来所 」(十九ウ)	【也、本土、衆生本来所居】働ナシ。
居、三身、衆生本有色心也。以	【三身、】底本「三」欠損、⑱ニヨリ補フ。慟ナシ。
今日信心、宜為成佛種」。 仰願	
受持読誦室内、預尺尊摩	
頂」、観念聴學窓前二、蒙山王守	
護」、自他法界共『、期佛恵』耳。	【法】 ⑱ナシ。○【耳】⑱「可云」⑱「耳ЁЁ」。
」(二十オ。底本ハ以下白丁。)	

*以上に続く、叡山文庫毘沙門堂本の末尾記事

本云、正安二年庚子五月二日如序。

問。一山三塔、即一心三観、三身一身之義也。若爾、以三塔

答。雖三塔寸ラーー、以両塔」為本也。東西両塔」本尊者、俱是本尊」、可為三身」。何但約東西両塔」、不取楞嚴院本尊」。

(以下、後欠)

養」厂儀」。

【本尊,】圆「乎」。

【東西両塔〉】◎「東西〉塔〉」。○【俱】◎「但」。